

平成30年度第2回学校教育審議会 記録

平成30年11月29日15:00～

市役所東庁舎 第2会議室

〔出席委員〕河村壮一郎、西坂千代子、吉田知子、井中貴史、伊木香代、松田恵、瀬尾津喜恵

藤山正明、名越和範、松井幸伸、山下千之、加嶋慎一（敬称略）

委嘱状机上配布	
1 開会	
司会 教育長	開会の宣言 開会挨拶
司会	資料確認・会の時間の予定確認
2 報告	
事務局	協議事項（１）（２）について資料に沿って説明
3 協議	
会長	校区、生徒数のことについて質問から受けたい。
委員	中学校だけの問題でなく、小学校のことも関わっている。社小学校は久米中校区にあるので基本的に小学校の間の交流は久米中としている。でも、その3分の1しか久米中には行かない。小学校では久米の歴史を学んだり久米中学校のことを学んだりするので、別の中学校に行ったときになじめない生徒がいる。登下校のことを考えたら久米中に行くより西中に行った方が安全な場合もある。社小学校から3つに分かれて進学することに対して特別にいい解決策があるわけではないが、今後どうなっていくのかということが気にかかる。
会長	関連して意見はあるか。
委員	家庭だけでなく、関係機関と学校が密に連絡をとる場合でも、社小学校は3つの中学校に関わりをもって出ていかれるのでたいへんだと思う。学校から一つの中学校への連絡経路になった方が、学校にお伝えしたいこともスムーズに伝わるし、お互いが同じ学校の子どもたちや家庭として何をしたらいいかという話をしっかりできるのではないか。
委員	中学校に入ってからトラブルも学校をまたいだものになってしまう。トラブルが起これば中学校の先生は、相手のことがわからない。親同士に横のつながりがあればいいが、中学校の先生同士で話をするときも、相手のことを全く知らない状態でトラブルになったことがあった。中学生にとっては、環境の変化に敏感なときであり、少しずつ自立していかないといかない時に、そこに大人が対応しきれていないところもある。兄弟で参観日などの行事が重なってしまい、片方には行けるが片方には行けないことがあるので、そのあたりをどうにかしてもらえたらすごく助かる。小学校のことも大事であるが、中学校の枠から考えて話を進めた方が実はスムーズにいくのではないか。
教育長	小学校の適正配置を考える中で、どの範囲がどの小学校に行くか、どの中学校へ進学するかということも当然見直さないといけないと思っている。協議会の中でどんな方法にしていくか話し合いたいと思っているが、その協議会の委員が出そろっていないくて、出ていただけるよう努力しているところである。本当は今おっしゃっていただいたようなことを協議会の中でも話し合ってもらいたいと思っている。 あと問題は、なかなか100%のコンセンサスは得られないので、では、どのくらいでゴールにするかということで、これは極めて難しい判断となる。だから1回、2回の話し合いではなく、また同じことかと思われても複数回の協議が必要と思っている。
会長	小学校の適正配置のことからんで義務教育学校のことも出ていたが、小学校だけとか中学校だけとかで考えるのではなく、一体的に考えないといけない。ただ、現状は委員が出ていないので話し合いが進んでいないということである。

教育長	久米中をどう維持するかも大事な話である。このままではいずれは1学級になってしまう。何とか2学級を維持するためには小学校の校区を増やすことも考えなければならない。それが先ほどからある3つに分かれていくことと大きく関わっていると考えている。
委員	子どもの数はどうしても増えない。それに対して、どういうふうに対策を立てていくかということであると思う。会が持てないというのは、委員が出そろっていないということのようだが、今PTAで出している方も子どもが卒業してしまうので、委員を新たに出さなければならなくなる。
会長	教育委員会で案なり方向性なりを出しても協議が進まない状況がある。市民の中にはあの話はもう終わったのか、しないのなら初めからしなくてもよかったという雰囲気もあるようだ。事情をわかっている側としては難しい問題であり、強権的にやってもいけないし拙速にやってもだめだしということがあるが、あの話はもう終わったのかと受け止めている人が多いように感じる。
委員	小学校低学年の保護者でこのことを知らない人もあるのかと思う。
会長	地区との話し合いの状況はどうか。
教育長	努力は続けている。確かにこのことが話題になってから7年は経っている。
会長	関心があまりない人にとっては何でもいから早く決めたらいいのにという人もいる。いろいろな配慮や了解を得なければならない中で、どうして決められないのかという人もあり、難しいことであると感じている。
委員	最初に出た案はあくまでも小学校の統合案ということで出ている。今日のように中学校のこともどうするかという話になってくると、それぞれの協議会で話をしてもまた難しいところが出てくるのではないかな。適正配置の計画を出す前段に統廃合の協議の場があったと思うが、中学校もこうやって問題になってくるのなら、その全体の会をもう一度せざるを得ないのではないかな。各地区で話し合っても、例えば社だけが久米中に行くとなっても、では今度は東中はどうなるかということも出てくる。案外、もう一回、全体で小学校と中学校を含めた話し合いからしていかないと立ち行かないのではないかな。
委員	保護者も入れ替わっているので、再確認をする意味でも全体での会をしてもらった方がよいのではないかな。
教育長	話し合いをもつときに、「さあどうしましょうか」では、埒が明かない。何らかの案、「これについてはどうですか」という示し方をしないといけないと思っている。それをこちらが主導で出してしまうと地域の気持ちを無視しているのではないかなということで、今うまく進んでいない原因になっていると捉えている。だからまずは個別に、「決して案のとおりに進めようとしているわけではない。スケジュールについても協議する中でもう一度考えていく会をしたい。」とお願いしているところである。 案を出していいということなら出すことはできる。川を渡っていくというのはつらいところがあるので、では、そこを境界にしませんかなど。でもそうすると今までの地域のつながりを無視する箇所も出てしまう。そこにいい考えだと言ってももらえるわけではない。だから少しずつでも話ができる場をつくってもらえないかとお願いしているところである。
委員	行財政改革ということで、市の姿をどうするのかというのが見えない。コンパクトシティにしたいのか。それぞれ拠点施設をつくって教育も福祉もやっていくのか。総合的にもっと締めて小さいものにしていくのか。すべては財政ありきの話ではある。ここ10年経たないうちに市内の姿が大変わりするのだろうと思っている。では、校区の考え方も今まで通りの小学校区でいけるのか。人口構成も見えていくと、福祉も教育もこれだけ課題が多いのにそれでもいいのか。公民館のことも出てきたが、小学校区でもいいのか、中学校区でもいいのかということも絶対考えていかなければならない時がくる。そんなに残された時間はない。そういう点

	で市長部局とどのように話をしていくのか。教育委員会だけで考えていいのかと いったらそうではないと思うし、そのあたりも詰めていかないといけない。
教育長	地域をどうやって守っていくかということは、市長部局の地域づくり振興課や 企画産業部なども入ってもらって、こんな方法だったらできるかもしれないとい うようなことをしていきたい。ただ、市は地域自身がどうしたいのかということ を大事にしたいというスタンスでいくのではないか。そこで地元の意向と市の思 いのすり合わせができるのかという思いもある。
委員	高齢者の問題がある。75歳以上が圧倒的に多くなる。児童生徒の数が減る中 で、この若い人たちでどう支えるかということで行くと、地区で必ず差が出てく る。
会長	適正配置の問題も高齢化が影を落としている。あと10年ぐらいは今のままで いいのではという思いが先だってしまう。実際には今、生まれた子が7、8年す ると小学校に入る。そういう子たちが、10年後、15年後、どうなのだという ふうに考えないと何が望ましいということは出てこない。そこを考えるエネルギ ーというか、倉吉市全体として若い人たちのことを考えて、この方がいいのでは ないかと考えるのはなかなか難しい。だから、皆さんはどうですかというスタ ンスも大事であるが、こういうことを考えてみたという具体案を出して、それには 当然、反対もあるが、心ある人はこうなっていかなざるを得ないという気持ちが沸 くのではないか。皆さんの意見はどうですかと聞くと、今のままがいいですとな ってしまうように思う。
委員	こういう場で話を聞けば、決して人の意見を押さえて進めようとしているわけ ではないということはすごく分かる。でも、一部の人たちの中には、自分たちが 言ってもどうせ聞いてもらえない、丸め込まれるだけで、協議会までいってしま うとあとは統廃合しかないと信じてしまっている人もいる。もっと言うと、最初 にああ言っていたのに、だんだんと違うことを言って、元のことと違うから市の 言うことは信用できないという人もある。 「今はこんなふうに言われる人もあるし、こんな意見も出ていて、反対意見は こうです。ここの地区の方の事情はこうです。」と、いいことも悪いこともみん なにわかるようにして、もう一回考えてもらう機会がほしい。噂の方が膨らんで しまって、市の未来のために始まった話なのに、人間不信みたいなそんな話にす り替わってしまうと、大事な話なのにもったいないと思う。反対意見も掘り起こ して全部の情報をみんなに分かるようにする。教育委員会の仕事ではないかもし れないが、そういう市の姿勢が見えたら、今の事情はこうだともう少し意見が出 しやすくなるのではないか。意見がたくさん出てから最終的に決めたらいいと思 うが、意見を出さないで裏でいろいろ言っているのが問題と思っている。
委員	上小鴨の会に出た時に完全に敵対心みたいになっていて、ここはたいへんだと 思った。山守小と関金小が合併したが、その前に、関金町が倉吉市と合併して、 確かに関金町がさみしくなって、不便を感じたりもした。しかし合併によって、 観光などでも一緒にアピールしていけるようになった。 山守小学校がなくなると地域が廃れるという話もあったが、今一緒になって、 学校に読み聞かせで入っているが、変な感じにはなっていない。関金の会で保護 者がどれだけ話をしたわけでもなかったように思うが、今、統合してみて、問題 も確かにあるかもしれないが、いい形になったのではないかとと思っている。
会長	それでは次に学力調査の関係でご意見・ご質問をいただきたい。
委員	子どもたちを見ていて読むこと、書くことが本当に苦手だと感じる。今、学習 支援をしているが、それでも文章問題になるとみんな大変そうだと感じる。新聞 を読んでみたらどうかと提案するが、新聞をとっていない。読書も学校の朝読で は読んでいるというが、子どもたちが読みそうなものを手に取ってみると一文が 短いものが多い。読み書き理解の面で小中学校でなかなか力を付けられていな いように感じる。

	文章で読み書きができないということになると他の教科にも関わってくる。理科で書いてあることも社会で書いてあることもわからない。数学の文章問題になると理論立てて考えられない。これが高校に上がってどうなるのかと思う。ここで力を付けていかないと高校で頭打ちになってしまう。学校は少しずつアクティブラーニングにつながるような工夫もされているが、調べるということが小学校も中学校もなかなかない。自由研究のないところもあるし、感想文もあまり書かなくなっているということを考えると、本当に基本的な力を身に付けられているのだろうかと思う。情報は溢れているが、ニュースも見ない、新聞も読まない。みんな携帯をもっているが自分の好きなところしか見ないので、結局は狭い範囲の情報収集になっていて、本当にこれでよいのかと思う。ただテストの点数をとるためだけの学力でない部分をどう育てるのかなというところで苦慮している。
委員	先ほどの読書ということだが、子どもたちは読書をしているのかと感じる。朝読書で少しは読んでいるかもしれないが。家の中でテレビを見たりゲームをしたりしてばかりいて、基本的なところが整っていかないと全体の学力として上がるのは難しい。ニュースを見たり新聞を読んだりして、それについて何だろうかと調べることもない。新聞を学校に持ってきてくださいということもあるが、新聞をとっていないという家庭も多くなっている。環境もすごく変わってきている。 文章に何かが書いてあるのか理解できない。小学校はまだ短い文章だからいいが、中学校になってすごく長い文章を読んでも、何かが書いてあるかわからない子が多いように感じる。図書館に行っても絵が描いてある本が多いと感じていて、字をあまり読まない。携帯電話も話しかけたら答えてくれる。字を読んでそのことを理解する力をつける必要があるのではないかとよく思う。
委員	学校ではチャレンジタイムで思考力が必要な問題をやっている。それでどれだけ成果が出たかということだが、なかなか見えてこないというジレンマもある。学力というのは確かに学校で付けるものだと思うが、生活自体が変わってきている中でそれだけでは難しい面もある。今考えているのは、保護者に何とかお願いして、土日に親子で一緒に解いていただくようなこともやっていかないといけないと思っている。読書も家でも取り組んでいただくとか、保護者にも協力をお願いして一緒にやっていきたい。
委員	PTA の中国ブロック大会に参加した時に、新聞を切り抜いて、意味が分からなくても毎日書き込むことで、なんとなく意味が分かってくるという話があった。その話を聞いて数カ月やってみたが、そうやって親も努力しないといけない。なぜ保護者が勉強を教えないといけないのかと言われることもあるが、勉強を教えるのではなく勉強の前段階。たぶん家庭で本を読むという習慣がある家庭では、本を読める子がいる。新聞を読む家は、新聞を読める子がいる。だから、すべて先生たちにお任せするというのは今の時代にあっていないと思う。子どもたちを育てることは丸投げすることではなく、みんなで協力して、この子どもたちを社会に出た時にいい形になるように取り組むべきことなので、親もできる限りのことはしていかないといけない。
委員	読み聞かせに来られる方の子どもがすごく読書が好きで、1年生の時から読解力とか思考力がすごい。それは学校が授業で育てたからといったら決してそうではない。ただ経済的な状況でできない家庭があるのもわかっているので、そのところは学校が何とか頑張らないといけないとも思う。
委員	若いお母さんと関わっている。本を読むこととか基本的な生活習慣ということへの捉え方、実際にやられることなど、お母さんを育てないとなかなか子どもに届かないと感じる。今、幼保小の連携で子どもたちは小学校と交流を持ったりしているが、子どもだけでなくお母さん方が小学校のことを情報として得られる機会があってもよいのではと思う。例えば、寝る前でもいいので一冊でも本を読む。毎日がたいへんなら一週間に何回でもいい。それだけでずいぶん違ってくる

	だろうと感じる。家庭での過ごし方についても、何をしたらいいですかと言われる人もいるが、「しなさい」ではなく、まず自分がやっている姿を見せてあげてくださいと言っている。小学校に上がっていくので、その準備をできるようなことは話し合ったりしているが、温度差はある。
会長	今、課題をたくさん出していただいているが、こういうよい点もあるということはないか。 よくOECDとかで日本は1番だったのが5番になりましたとかいわれるが、5番でもたいしたものだと思っている。トップとの差がほんのわずかなのに大騒ぎをすることもある。実態はほとんど変わらないということも結構ある。OECDのテストでそれまで参加していなかった国、例えば香港とかシンガポールが入ってくると、順番でいうと下がってしまう。冷静に考えてみたら、日本の義務教育は予算に比べたらすごくレベルが高い。ただ、今、起こっている問題は、教育だけでなく、国全体としての経済だとか産業の問題とかによって家庭の文化力、教育力が以前より落ちていることによるのだとしたら、それは教育委員会でがんばりなさいだとか学校でがんばりなさいという話ではない。だから、あまり今の問題点を矮小化して学校の問題だとか教育委員会の問題だと考えてしまったら対処の仕方を間違えてしまう。
委員	数字だけを見たら先生たちはよく指導していただいている。子どもたちもがんばっている。
会長	例えば福井県が、秋田県がということで順番を気にする。どれほどの差ということに気にせず順位だけを気にしているところが大きな問題だと思う。
教育長	数字のことをいうとその通りで、統計を読むときにはプラス5%より上にあるときは明らかに「高い」、マイナス5%より下にあるときは明らかに「低い」と読むそうである。学校には、マイナス5%より下がっていたら明らかに問題で子どもたちに力を付けないといけないという話をしている。今回、全国学力・学習状況調査の結果を示したのは、新聞等で報道されていて、皆さんがよくご承知のことだからだが、学校がこれをどう思っているかという、これは教育活動のほんの一部であると考えている。学校で学ぶことは国語と算数だけではないし、人間力に関わることをどうやって伸ばしていくか学校は一生懸命にやっている。計画訪問で本年度、半数の学校を訪問したが、子どもたちの状況はとてもいい。本当に元気だし、授業も前向きに勉強しようとしている。この子たちにきちんと力を付けようと思ったら、教員が指導する力をもたないといけない。先生たちに今のような話をしている。
会長	全国学力学習状況調査のもともとの趣旨が、自分たちの学校の課題を見つけてりして改善に活かすということだったはずで、そのようにしておられるということである。
委員	学力がこの後のいじめや不登校の問題に関わってくることがたくさんあるので、そちらの方が重要。できるだけそういったことが数少なくなるような対策をやっていかないといけない。
会長	課題と考えていることに、家庭での予習・復習のことがあった。全国平均に比べて13%低いということであるが、これは大きな問題かもしれない。
教育長	これは明らかに大きな課題である。
会長	これは、どの中学校でも意識して取り組んでいるということですね。
教育長	現場にいる時に保護者に話していたことで、起きる時間と寝る時間と家に帰って机に向かう時間の3つをほぼ固定してもらえませんかとお願ひしていた。起きられたら朝ごはんを食べる。何時になったら机に向かうとなったらきつと何かする。この時間になったら何々するというのを家でやってもらったら、そんなに困ったことにならないと思う。そういうことを可能な限り、学校でも保護者に伝えてもらうようにしている。
会長	それでは、いじめや不登校の問題についてご質問・ご意見はあるか。

委員	確認したいが、長期欠席と不登校であるが、何日以上のことをいうのか。
教育長	年間３０日以上となる。長期欠席という言い方が幅が広くて、３０日以上欠席していると全部長期欠席という。その中に不登校に分類されるものと、例えば病気などで学校に行けないというものに分類される。
委員	ここ何年か倉吉市の不登校率は高いと感じている。全国平均だけでなく県との違いもはっきりしている。今までも考えられていたと思うが、かなり早めの対策が必要と感じている。 以前、平成１１年、１２年のころにピークがあったが、当時スクールカウンセラーを全校配置したり、回数を増やしたりして下がっていったように思う。今回、出現率が上がってきているし、定着しているところもあるが、何か対策をなされているところがあればお聞かせいただきたい。
教育長	個別にいろいろ事情があり、明確にわからないところもある。ただ、ほっているのかといったらそうではなく、先ほどスクールカウンセラーの配置のことがあったが、今はそれに加えて、スクールソーシャルワーカーという家庭の中にまで入っていける人を教育委員会の中に複数、配置している。学校の求めに応じて、各家庭を訪問するなど、かなりいい動きをしている。 欠席が３０日を過ぎた場合はカウントを減らすことはできない。ただ現状は、学校に復帰している子もこの中にはかなりいる。学校には、こういうふうにやったら元気に戻れるというものはないので、とにかく粘り強く継続してできる取り組みを続けてくださいと話している。あわせて、スクールソーシャルワーカーの話をしたが、学校だけで何とかしようとしてもできないことも多々ある。その時にどこにヘルプを言えばよいかということも大事だと学校には話している。案外、公民館が頼りになったりすることもある。
委員	小学校の時から不登校率が高くて反映しているということもあるのか。
教育長	近年はそう思う。以前は小学校の低学年の不登校はほとんどなかった。ところが今は小学校の低学年でも３０日以上欠席が出てきていて、これはかなり危ないのではないかなと思っていたら結果として高くなってきている。
委員	不登校以前の問題だが、今年、就学時検診で保護者と面談をしたときに、小学校に行かせるかどうか分かりませんという保護者がいた。子どもが学校に行きたくないと言ったら無理には行かせませんので知っておいてくださいと言われた保護者がある。価値観の多様化というか、とにかく子どもの意志を尊重したいという保護者がいて驚いた。
委員	それは小学校には行かせないけど、何か他の所に行かせるということか。
委員	それはあるかもしれないが、よくわからない。
委員	今は、いいのか悪いのか何でも個人情報だといわれる。他人に言ってほしくないと。一昔前は地域としてみんなで育てていた。隣の子にも「何しとる」と言えていたが、地域としても言えなくなっている。元気な年寄りもいるが、そうした人たちが言えなくなっている。その家にも入れないし、そのお母さんも相談できない。誰かにヘルプを出してくれたら、こちらも言いやすいが、個人情報だと言ってガードされてしまう。そのあたりが地域としてもやりにくい。
委員	思いを吐き出せなくなった時に行けなくなることもある。それとは意味合いが違うのか。
委員	それとは違う。小学校は１時間目が何、２時間目が何と決まっている。そんな嫌だから行きたくないということのようである。
委員	保護者にとっても学校が楽しくなかったのだらうと思う。

委員	20年以上前の話だが、子どもに10日間の休暇を与えているという方があった。子どもが行きたくないと言ったときは休ませると決めている。今の学校のやり方は、集団で同じように動かそうとしていて、それが気に食わないと言っておられた。
教育長	学校でないところでも育ちますよという価値観が今はある。学校は学ぶところだから、学校に行かせようとするが、時々、本当にそれでいいのかなと思うことは確かにある。仕事柄、不登校の子どもに何人か出会ってきたが、今は休ませた方がいいという時期が確かにある。エネルギーが切れていて充電が必要な場合がある。充電期間が一日で済む場合もあるが、一年かかることもある。いずれかは本人が何とかしたいと思いつくので、そのままということはないと思っている。
委員	自分の中で充電の仕方を見つけられるように成長したらと思う。
教育長	学校を選ばなかったときにどこがあるか。都会にはけっこうあるが、倉吉市にはあまり選択肢がない。中部子ども支援センターには本当によく見ていただいているが、それ以外のところはそんなにない。そう考えると充電期間が必要な時もあると思うが、最終的には学校に戻ってきてというメッセージを送り続けるとのことだと思っている。
委員	家の中で役割を持たせるなど、家庭で何か働きかけがあれば、必ず刺激があるので、子どもは変わっていくが、何もされない家もある。部屋に閉じこもったまま、食事を持っていき、それも片づける。極端に言えば、もっとほったらかし状態の家もある。そこが大きな問題だと思う。大人の関わりが全くなくなっている子どももある。そういうところをどうするか。本当は子どもたちは誰かと関わりたいし、何かやってみたいという思いがあるのに家に引きこもってしまう。学力ももちろん、どんどん忘れてしまう。小学校の1年生からでももう一回やらなければならぬ中学生もいる。家庭で何かしてもらえるところはまだいいが、何もしてもらえない自尊感情ぼろぼろの子をどうするか。 パワーがある子はどんどん外に出て悪いこともする。でも、まだパワーがあるので、引き戻せると思う。出て行かないという状況になっている子どもをどうするかということが問題である。保護者は困っているのだろうが、個人情報でいっさい関わりを持ちたくないという人もある。できれば早期に保護者に支援ができて相談できる場所があれば、そこから引き継いでということもできるのであるが、それも切れてしまっている。 不登校とか学力の問題もそうだが、たぶん不登校に入っている子どもの成績は出ていない。本当はそこをどうするかというところを取り上げていかないといけないと思う。要対協もうまく機能しないところもあったり、できないこともあったり、児相もそうだし、どこに手立てをできる場所があるのか、福祉と教育でもっと密に連絡をとりあって何ができるかというところを考えていかないといけない。 家庭だけに任せられる時代ではないといろいろなケースを見てきて感じる。ではどこで伴走支援できるかが一番大事だと思う。子どもたちは成長したいと思っている。いかんせん気にも留めてもらえない子がいるという現実を見つめていけないといけないと思う。
委員	個人情報のことだけがヘルプにできない原因ではないかもしれない。地域も入っていいのかなと遠慮があるし、保護者も困っているが、では、どんな口火を切ってどうすればいいか具体的にわかっていなくて、どちらも遠慮合っている。 発達障害の問題も増えつつあり、気になる子どもも年々増えている。そういうことをきっかけにお母さん方と話をし合うが、そういうことをやると本当に涙ながらに相談される方もある。「まず、これをやってみましょうか」というところからアドバイスして、実際に少しずつ子どもが変わっていくというところも見られる。

	お母さん方も仕事をめいっぱいやっていて責められない。早寝させてくださいと言ってもこの時間まで仕事がかかるんですと言われると、そこから食べさせることを考えると確かにこの時間になるのだろうということになる。睡眠の大事さはわかっておられるのだろうが、そこが難しいと言われると、では何ができるのだろうと考えてしまう。保護者も本当はヘルプがほしいので、こちらも遠慮せずに声をかけるようにしている。個人情報だけがバリアではなく、コミュニケーションのやり取りをふだんしていないために遠慮し合っているのだろうと思う。
委員	背景には深い問題がある。学校では分かりにくい家庭や地域の多様な問題もあるのかと感じた。
教育長	スクールソーシャルワーカーの役割は、家庭に入ったときに子どもだけでなく、保護者の支援もある。そこから始めないと関係を切られてしまう。
委員	育児休暇がこれだけ長期で認められるような時代になっても、本当に低月齢で保育園に連れて来られる。親がどれだけ接しているのだろうと思う。
委員	育休がとれないという家庭が多い。どれだけ県内の人にとれているのかという話になる。家庭の問題が見えてきたら、次はどこにつなげばよいかという仕組みをつくらないと、学校だけ、ソーシャルワーカー、カウンセラーに任せるだけでは無理な話なので、福祉の体制で下支えが作れるというところが大事である。子どもの問題といいながら福祉の問題や雇用の問題がリンクしていて、縦割りの行政はやめてくださいと言ってきているが、一人のケースに対してのいろいろな関わりをどうつくっていけるかというところを考えないと解決しない。学力をつけないまま成人にしていくことのマイナスをどう考えるか。関係機関が知恵を出さないと本当にできない。今、学校の中だけにとどまっているように感じる。個人情報もあってなかなか出されないが、守秘義務かけてやっていきましょうというところもあっていいのではないか。
会長	部活や教員の配当数についての意見はあるか。
委員	文化部の部活が中学校でかなり違うように思う。
教育長	名前が違うだけである。文化系に行きたいけど吹奏楽部には入れないからとりあえず入っている子達や、社会体育で何らかのスポーツクラブに入っていて、本来はサッカー部に入りたいけど、登録が二重になってしまうので、部は美術に入っているような子もいる。
委員	文化祭だったら学習発表会的なことができるが、各校がばらばらに活動しているところで、何か横のつながりができればと思う。
教育長	名前は違うが、何らかの受け入れ可能な部をそれぞれの学校が用意していると捉えていただけたらと思う。
会長	教員の得意分野ということはあるか。
教育長	持てる人に何とか頼んでいるのが実態である。
委員	倉吉北高のインターアクトのようなことをやって、横のつながりをつくったらと思う。
教育長	今は分からないが、以前、河北中のホームプロジェクトで紙芝居をつくって、お年寄りの施設を訪問するということを活動としてやっていた。
教育長	社協が去年からボランティアフェスティバルをしていて、そこに北高のインターアクトが手伝いにきて、ものすごくいい動きをしていた。そういうところに中学生が参加してもいいのかなと感じた。
会長	部活について、各中学校の教員、生徒、保護者の現状に対する声というのはあるか。
教育長	久米中と鴨川中にサッカー部がなく、そのことについての意見はある。学校は違うが一緒にできる仕組みができないかと考えているが、どうやったらそれが実現できるかと思っている。
委員	どうしてもサッカーをしたいから、サッカー部のある学校に行けないだろうか

	という話がある。
教育長	東京都は部活を理由に校区外就学を認めているが、鳥取県は認めていない。都会みたいに鳥取県の規模で認めてしまうとすごく偏りが出てしまう。そうすると維持ができない学校が出るという心配があって、県内はそうなっている。
会長	高校ではインターハイに出られそうな学校をめざして進学するというものもあるが、それが小学校から中学校に進学するときに影響するというのはたいへんなことである。
委員	部活は学校を取っ払うのがいいのではないか。高校では、東高が農高にアーチェリーをしに行っている。あまり遠いところへ行くのは難しいが、近くで認められるようになればと思う。本当に上手な子がそこでできないのはもったいない。
委員	今の久米中2年生は小学校の時にサッカー部があったので、6、7人はいた。でも久米中はサッカー部がないので仕方がないから陸上部に行く。何年か前になくなったが、なぜサッカー部なのかというと、野球だと9人、サッカーは11人で、これから人数が減ることを見込んで結局削ったということであった。
委員	教育委員会で放課後にバスを出したらどうか。
教育長	そういうことも考えないといけないかもしれない。
委員	西中の剣道部の女子は1名しかいない。一人だから東中に行ってよいという制度ができれば自転車で通うことができる。
教育長	制度まで作らなくても、そういう事情をお互いに話して、保護者が了解されればできる。ただ一番心配なのは、移動中に何かあったら誰が責任をとるかということが問題になってくる。
会長	教職員の時間外労働の件で、部活動の指導ということがある。どんどん生徒数が減る。職員の定数が減る。今までの部活の種類が確保できなくなる。そうすると自分の得意な部活ならまだしも、そうでないものを時間外労働でするのは負担感がすごい。国全体でも議論されていて、いずれはどうするかという話になるとは思うが、ある程度近いところであれば、そういう融通がきくということも考えていかないといけないかもしれない。
委員	ある程度、人数が必要な部活であれば固まってここですするというようにして、指導者も学校の先生だけでなく地域の中で得意な人に指導してもらおうという仕組みをつくらないといけない。
教育長	外部の方の協力についてだが、部活動指導員という準教員立場で雇用することになる。その仕組みは今度の4月に向かって予算要求するようにしている。課題はほぼ毎日来てもらえる人をどうやって確保するかというところがある。
会長	高校の場合はかなり専門的な立場の方がおいでになる。ただ学校教育ではなくて、いかに成果を上げるかという思いが強く、学校の行事のことを話しても、そんなのはだめだから練習させたいという話になって、折り合いが難しいということもある。そのあたりもすり合わせが大切である。
会長	他に意見はあるか。
委員	いろいろ話を聞いていたが、親の役割が大事だと感じた。わが子を見ても親の姿が映る。親をいかに育てるかということも大事だと思った。
委員	今日は今までにないくらい、いろいろな意見が出された。話しっぱなしで終わるのではなく、その後どのような取組がなされて、結果どうなっていったのか。一つでも階段を上がることができたのかということを今後教えていただきたい。
教育長	努力したい。
会長	会の冒頭の部分でも、すべてはできなくても、簡単にでも報告していただけたらと思う。以上で協議を終わりたい。
4 閉会	